

県立高等学校教育課程課題研究（英語）

学習指導要領の改訂により、英語教育においては、言語活動を中心に据えた授業の中で、コミュニケーションを図ろうとする資質・能力がどれほど身に付いたかを、目標に照らして三つの観点で評価していくことがより一層求められることとなった。本研究では、令和3年度はパフォーマンステストを3観点で評価する際のルーブリックについて研究を進めてきた。単元の目標への到達度を測るためのパフォーマンステストの設定の仕方、パフォーマンステストで適切な評価を行うためのルーブリックの在り方について実践例とともに紹介する。

＜検索用キーワード＞ 観点別評価 学習到達目標 パフォーマンステスト ルーブリック
話すこと〔やり取り〕 話すこと〔発表〕 書くこと

運営委員長

愛知県立知立東高等学校長

川澄 誠（令和3年度）

運営副委員長

愛知県立時習館高等学校教頭

齋藤 隆弘（令和3年度）

運営委員

高等学校教育課課長補佐

井上 猛（令和3年度）

高等学校教育課指導主事

森本 芳裕（令和3年度）

高等学校教育課指導主事

竹内 賢一（令和3年度）

高等学校教育課指導主事

藤原 一博（令和3年度）

総合教育センター研究指導主事

佐々木 香（令和3年度）

総合教育センター研究指導主事

武田 邦生（令和3年度）

総合教育センター教科研究室長

内山 真一（令和3年度主務者）

研究員

愛知県立惟信高等学校教諭

久納 知幸（令和3年度）

愛知県立中村高等学校教諭

池田 達哉（令和3年度）

愛知県立天白高等学校教諭

磯部 智洋（令和3年度）

愛知県立岩倉総合高等学校教諭

藤本 貴之（令和3年度）

愛知県立尾西高等学校教諭

岩本 修（令和3年度）

愛知県立杏和高等学校教諭

山崎 綾子（令和3年度）

愛知県立大府東高等学校教諭

榊原 啓文（令和3年度）

愛知県立岡崎高等学校教諭

市川 雅之（令和3年度）

愛知県立岩津高等学校教諭

荻窪 雄太（令和3年度）

愛知県立幸田高等学校教諭

戸田 康弘（令和3年度）

愛知県立吉良高等学校教諭

杉浦 修平（令和3年度）

愛知県立知立東高等学校教諭

森島 崇（令和3年度）

1 はじめに

平成 30 年に高等学校学習指導要領が改訂され、令和 4 年度から年次進行で実施されることとなっている。今回の改訂では、身に付けさせたい資質・能力が三つの柱で整理され、評価規準も三つの観点に整理された。英語教育においては、言語活動を中心に据えた授業の中で、コミュニケーションを図ろうとする資質・能力がどれほど身に付いたかを、目標に照らして三つの観点で評価していく必要がある。そのため、目標に準拠した評価、観点別評価がこれからの高等学校の教育では今まで以上に求められることになる。

内容のまとまりも、これまでの 4 技能から 5 領域に改められた。特に、「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」「書くこと」の領域では、パフォーマンステストの結果を基に評価を行うことが考えられる。愛知県英語教育改善プランでは、令和 3 年度の重点目標の一つに「各学校におけるパフォーマンステストとして、スピーキングテスト及びライティングテストを令和 3 年度までに各科目において年間 3 回以上実施する」ことが挙げられている。パフォーマンステストを確実に実施し、適切な評価を行っていくことが今後の授業改善につながり、ひいては生徒の学力向上にも大きく貢献することとえられる。

このような状況を踏まえ、県立高等学校教育課程課題研究（英語）では令和元年度より、パフォーマンステストについて研究を進めてきた。令和元年度は、パフォーマンステストを導入する際の留意点について研究し、Q & A 形式のリーフレットを作成した。令和 2 年度は、パフォーマンステストにいたる指導方法について研究し、e ラーニング教材を作成した。令和 3 年度は、パフォーマンステストを 3 観点で評価する際のルーブリックについて研究を進めてきた。本研究では、単元の目標への到達度を測るためのパフォーマンステストの設定の仕方、パフォーマンステストで適切な評価を行うためのルーブリックの在り方について実践例とともに紹介する。

2 研究の目的

「話すこと [やり取り]」「話すこと [発表]」「書くこと」の三つの領域における学習到達目標と評価規準を提示し、「おおむね満足できる姿」をルーブリックとして具体的に示す。また、県内の高等学校でのパフォーマンステストの更なる充実（質の向上、実施率の増加）に資することを目指す。

3 研究の方法

- (1) 「話すこと [発表]」「話すこと [やり取り]」「書くこと」の三つの班に分かれ、単元で身に付けさせるべき資質・能力を測るためのパフォーマンステストとルーブリックの例を提案する。
- (2) 実践報告を基に研究協議を行い、提案したパフォーマンステストとルーブリックの成果と課題についてまとめる。

4 研究の内容

(1) 話すこと [やり取り] 班 愛知県立中村高等学校の実践

本実践では、Which is more important for good health: a regular exercise program or a balanced diet?というテーマについてディスカッションをするパフォーマンステストを行った。

指導の段階で、OREO (Opinion-Reason-Example-Opinion) の論理構成と理由を述べる際に有用な表現を指導したことにより、生徒は社会的な話題をやり取りする際に、論拠とともに自分の意見を述べることができるようになった。パフォーマンステストは 3 人のグループで行った。生徒のやり取りをタブレット端末で録画するとともに、ICレコーダで録音した。評価の際には、ルーブリックをALTと共有

して共同で評価をしたことで、パフォーマンステストの評価の信頼性を高めることができた。課題としては、評価をするのに多くの時間がかかったことが挙げられる。ICT機器を有効活用し、効率的に評価を行う方法を探る必要がある。

(2) 話すこと〔やり取り〕班 愛知県立岩倉総合高等学校の実践

本実践では、教科書で扱った環境に関するトピックで、2分30秒以上会話を継続させることを目標にパフォーマンステストを行った。

指導の過程で継続的にSmall Talkに取り組ませることにより、さまざまな話題について質問したり、適切に応答したりする力の育成を目指した。活動の初期段階では数多くの質問例を提示したが、段階的に質問例の数を減らし、最終的には質問例がなくても会話を継続できるように指導を行った。

パフォーマンステストは、実施の一週間前にルーブリックを提示し、生徒が自ら見通しを立てて学習ができるように配慮した上で実施した。ルーブリックの評価項目に「Fluency(なめらかさ)」を設定し、ルーブリックによる評価結果と生徒の振り返りから、「主体的に学習に取り組む態度」の面での学習改善の手がかりを見つけることを試みた。生徒は、自らの学習成果から、次への課題を見出すことができた。今後は、これらの生徒の気づきを今後の学習改善に生かすために、具体的にどのような方策をとっていくかを明らかにしていくことが課題である。

(3) 話すこと〔やり取り〕班 愛知県立大府東高等学校の実践

本実践では、環境保護のために自分ができることについてディスカッションをするパフォーマンステストを行った。日々の授業の帯活動としてSmall Discussionを行い、使用できる表現やディスカッションの方法を練習させた。また、ロイロノート・スクール(株式会社LoiLo, 以下「ロイロノート」と表記)を利用して振り返りを適宜提出させ、学習に取り組む態度の向上も図った。パフォーマンステストのテーマは事前に発表しておいたが、ある程度の即興性を担保するために、グループ編制は当日発表することとした。パフォーマンステスト終了後には自己評価させた上で教師からのフィードバックも与え、学習方法の改善を図った。パフォーマンステスト後のアンケートでは、多数の生徒が「ディスカッションにおいて、自分の意見を言える」ようになったと回答し、英語力の向上のみならず、情緒面での向上も得られる結果となった。

(4) 話すこと〔やり取り〕班 愛知県立岩津高等学校の実践

本実践では、「もし自分がオーストラリアの首相だとしたら、Uluru(エアーズロック)に登ることを禁止するか」についてペアで話し合うパフォーマンステストを行った。このテーマは、教科書で観光産業の発展と観光地の保護について学んだ単元の学習到達度を図るために設定したものである。

ルーブリックでは、主に、相づちのように会話を円滑に進める表現を自然に使うことができること、自分の意見を理由や根拠とともに述べるができること、相手の意見に合わせた反論ができることなどを評価することとした。普段の授業の中でコミュニケーション活動を行う際に相づちなどの表現を使わせたり、自分の意見を伝え合ったりする際には理由や根拠とともに話すように促すことを、他の科目とも共通して継続的に行った。

その結果、「相手の意見に合わせた反論をすることができる」に関しては少し課題が残ったものの、ほとんどの生徒が「十分満足できる」又は「おおむね満足できる」状況と判断され、指導の成果と今後の課題をパフォーマンステストの結果により確認することができた。

(5) 話すこと〔発表〕班 愛知県立惟信高等学校の実践

本実践では、ALTの要望に沿った誕生日プレゼントを紹介するというパフォーマンステストを行った。生徒の興味関心を踏まえたテーマにするために、ALTに書いてもらった要望書を基にどのような

プレゼントを選ばよいかを考えさせた。また、教科書よりも詳細に目的・場面・状況を設定して生徒が活動しやすいように留意した。指導の際には、モデルプレゼンテーションを視聴させてプレゼンテーションのポイントを確認させた後に、何ができていれば「a」評価となるかを生徒に考えさせた。この結果、生徒に評価の観点をより具体的に認識させるとともに、ループリックの改良にもつながった。

パフォーマンステストは、生徒がタブレット端末で録画した動画を Microsoft Teams にアップロードする形式とした。タブレット端末を活用することで同時に多人数が発表できるため、効率的に実施できるという効果だけでなく、生徒の主体的に学習に取り組む態度の向上や評価の信頼性の確保にも効果を上げることが分かった。

(6) 話すこと〔発表〕班 愛知県立杏和高等学校の実践

英語表現Ⅰにおいて、単元のまとめとして「長友選手が世界で活躍するまでの道のりについて、書かれた文章の内容を活用しながら、長友選手の経験や思いを想像して発表する」という言語活動を設定して、指導とパフォーマンステストを行った。パフォーマンステストは、インタビュー形式のロールプレイを行った。トーク番組に出演する長友選手と番組司会者というペアを設定した。

9時間で完了する単元の7時間目をパフォーマンステストの準備とし、ペアでインタビューの原稿の作成と練習を行った。原稿はロイロノートで提出させたため、生徒は自宅でも十分に練習することができた。8時間目にロールプレイでの役割を発表し、パフォーマンステストを実施した。十分な練習時間を取った上でロールプレイの様子を動画撮影し、ロイロノートで提出させた。9時間目は提出された動画の発表会を行い、生徒同士の相互評価とフィードバックを行った。ループリックは事前に配付し、生徒が見通しをもって学習に取り組めるようにした。また、「積極的に英語をたくさん話す」ことを重視したため、「accuracy（正確さ）」については最低限伝わる英語という観点のみで評価することとした。

今回の実践により、単元の最終タスクであるパフォーマンステストに向けて主体的に活動する生徒の姿が見られ、内容理解が深まったことが分かった。今後は、評価の効率化、PDCAサイクルの確立などを目指していきたい。

(7) 話すこと〔発表〕班 愛知県立岡崎高等学校の実践

本実践では、三浦公亮氏が発明したミウラ折りと通常の折り方の違いについて発表するパフォーマンステストを行った。生徒が言語活動を通して学習した語句や表現を、自分の考えを伝えるために自発的に使用する場を設けるために、単元の内容について実際に作業、体験、観察をして、考察したことを発表するものとした。ループリックについては「主体的に学習に取り組む態度」の評価に、事前に学習したプレゼンテーションの型に則っているかという項目を含めた。実践の結果、生徒は教科書で扱った語句や表現を知識として覚えるだけでなく、活用することができていた。また、プレゼンテーションの型に則って発表をするという成果が得られた。反対に、一人当たりの発表時間が短かったため、録画して提出する方法が考えられるものの、録画の方式では聴衆に対するアイコンタクトができないことや質疑応答の時間が取れないことなどの課題が残った。

(8) 話すこと〔発表〕班 愛知県立吉良高等学校の実践

本実践では、英語表現Ⅰの授業において、書いたことを基に発表するというパフォーマンステストを行った。パフォーマンステスト前時に、「学校のルールを三つ、助動詞を用いて述べる」活動を行い、次の時間に「理想とする学校のルールを理由とともに述べる」というパフォーマンステストを行った。ループリックについては、「思考・判断・表現」の観点で、「①助動詞を使って理想とする学校のルールの一つを示している」「②10語以上使用している」「③なぜそのルールにしたのか理由を述べている」の三つの条件を設定した。指導したことを評価することと、条件を詳細に設定したことで判断基準が明確にな

り、評価を行いやすくなった。反対に、指導を十分に行わなかった事項は評価の際に判断に迷うという課題も明らかになった。

(9) 書くこと班 愛知県立天白高等学校の実践

本実践では、教科書を読んで考えたことや感じたことを理由とともに書くというパフォーマンステストを実施した。「海外を訪れた際にその土地の文化に順応するか」というテーマで 80 語以上書くというもの。このテストは定期考査の一部として実施した。指導の際には Google Classroom を活用し、教師による添削や生徒同士の意見の共有を行うことで、表現方法や内容面の充実を図った。

ループリックには、「意見とそれに対応する理由とサポート文が書かれている」「他の生徒の考えや表現を参考にしながら、内容を充実させている」の 2 点で「知識・技能」「思考・判断・表現」を評価した。また、Google Classroom に自分の意見や質問を投稿したかどうかで「主体的に学習に取り組む態度」を評価した。

以前に同様のライティングテストを行った際には、文章量が少ない、理由が書かれていないなどの課題があったが、今回はそれらの課題を改善することができた。

(10) 書くこと班 愛知県立尾西高等学校の実践

本実践では、「自分の希望する専攻分野に関して志望理由を書く」ことをパフォーマンステストとして行った。ループリックは、4 段落以上の構成とすること、志望理由の具体例や今後の抱負や夢を含めること、論理構成が分かりやすく平易な英語で書くことで「知識・技能」「思考・判断・表現」を評価することとし、生徒の活動状況の観察やハンドアウトの内容などから「主体的に学習に取り組む態度」を評価することとした。

指導では、教科書を利用して表現を習得させたのちに、インターネットを利用して内容について調べ学習を行い、構成を考えて原稿を書かせた。原稿を他の生徒と共有して意見を出し合い、改善を図った。同じ内容で定期考査の一部として出題し、パフォーマンステストとした。ループリックで条件を詳細に設定したことにより、教師のサポートは前提であるが、スムーズに実施できた。自分の考えを明確にもっている生徒は、「知識・技能」で高い評価を得られなくても「主体的に学習に取り組む態度」では高い評価を得ることができた。

(11) 書くこと班 愛知県立幸田高等学校の実践

本実践では、思い出の写真について 60 語程度の英文を書くというパフォーマンステストを行った。パフォーマンステストで作文を書く際には制限時間を設けるが、指導の段階では何度か書き直させ、添削指導の機会を設けることで生徒の主体的な学習を促した。評価については、「知識・技能」の観点では評価する項目を限定したため、生徒は焦点化した学習を行うことができた。また、教師は効率的に客観性の高い評価を行うことができた。「主体的に学習に取り組む態度」の観点では評価項目に添削の回数を入れて客観的な評価を行おうとしたが、他の観点との不整合を引き起こす結果となった。この観点についてはどのようにして客観性と妥当性をもたせるかが課題として残った。

(12) 書くこと班 愛知県立知立東高等学校の実践

本実践では、修学旅行の目的地である長崎について 80 語以上のまとまった文章を書くというパフォーマンステストを行った。生徒にパフォーマンステストの案内をする際にループリックも提示し、First Draft を書かせた。First Draft の提出後、教員間で Final Draft 作成に向けての指導方針について話し合い、その結果、ループリックの改訂を行った。生徒に配付した Self-evaluation Sheet にもループリックを掲載し、自己評価、相互評価、教員からのフィードバックに活用した。「書くこと」の領域の評価においては、正確さを中心したいという考えもあったが、たくさん書くことを目指して「伝わる英語」

という点を重視した。また、「主体的に学習に取り組む態度」を First Draft から Final Draft への改善の意欲で測ることとした。

今回パフォーマンステストを実施するに当たり、他の教員の共通理解を図ったことで英語科全体の指導改善が進む結果となり、CAN-DO リストの改訂にもつながったという成果が得られた。

5 研究のまとめと今後の課題

パフォーマンステストを行うことで目標の明確化と共有を図ることができた。多くの実践報告が示すように、事前に生徒とルーブリックを共有することで生徒が目標を意識して取り組むことにつながり、効果的に指導をすすめることができた。また、周囲の協力を得て実施することにより、教員間の共通理解の下でパフォーマンステストを行うことができたり、中には、CAN-DO リストの見直しにつながったりする実践もあった。

また、パフォーマンステストを契機として指導と評価の一体化が図られ、今後の指導改善や授業改善のヒントを見つけることができた。今回実践を行った多くの学校で、帯活動として Small Talk を取り入れたり、継続的に論理構成を指導した上でパフォーマンステストを実施したりするような授業へと改善が図られている。また、指導の過程で Rubric の見直しを行うことにより、効果的な指導・評価につなげる実践もあった。

今後の課題としては、どのような手段で三つの観点を評価すれば、より信頼性のある評価になるのかということがある。特に主体的に学習に取り組む態度は評価しにくく、多くの研究員が工夫を凝らしてこの観点を評価しているが、他の観点とのずれが生じるなど、まだ研究を進めていく必要がある。長期的な視点で生徒の資質・能力の育成を図り、育成した資質・能力をパフォーマンステストで見取る方法を研究することが解決策の一つと考えられる。

また、パフォーマンステストの実施と評価に時間がかかることも課題の一つである。実践報告の多くで、ICT 機器を効果的に活用して、評価の信頼性と効率を高めている。ICT 機器の効果的な活用が解決の一助になると考える。

6 おわりに

本研究ではパフォーマンステストとルーブリックを中心に評価について研究を行ったが、評価の改善を図るためにはCAN-DO リストなどの目標の改善、指導方法や学習方法の改善など、指導と評価の一体化をさらに推し進めていく必要があるということが分かった。今後は、長期的な視点で計画を立てて、いつ、何を指導し評価すべきかを研究していく必要があるだろう。また、系統的な指導で生徒が意欲的に学べる手だてや、教員の共通認識の下での評価の在り方を研究する必要があるだろう。

次年度（令和4年度）から新しい学習指導要領が年次進行で実施される。本研究が新学習指導要領下での指導や評価の参考にいただければ幸いである。